

プラハが生んだ二つの顔 ——カフカとハシェク——

飯 島 周

世界的に有名な作家F・カフカ (Franz Kafka 1883—1924) と J. ハシェク (Jaroslav Hašek 1883—1923)¹⁾ は、同年にプラハに生れ、この町を中心にして創作活動を行い、相前後してこの世を去った。1983年は、この両者の生誕百年を迎えることになる。中欧の古都プラハが生んだこの二人の作家は、性格的にも作品的にも、まことに対照的な存在であり、その比較は尽きぬ興味をそそるが、この機会に二、三の対比を試みたい。

(I)

両者は、同じ時代と同じ都市を背景にして生活し、共に一種の閉塞感を抱き、共に寓話的作品に活路を見出しながら、カフカは抽象的空想に逃げ、ハシェクは具体的状況と対決した。二人がこのように異なる道を辿ったのは、それぞれの基本的な性格ばかりでなく、生立ちや環境の差も影響したと思われる。すなわち、ユダヤ系の商人であるきびしい父親の支配下にあったカフカは、チェコ風の姓を持ちチェコ人に囲まれながら、ドイツ語による教育を受け大学で法律を修め、多くの批評家が指摘するように、社会的、宗教的、言語的な幾重もの見えざるゲッターの中に閉じ込められていた。これは、絶えざる疎外感と自己確認の要求、さらに亡命者的な精神状態を生み出したであろう。これに反し、ハシェクは、あまり豊かでない中等学校教師を父とし、純粋にチェコ的な環境で育ち、アルコール中毒だった父の死による経済的困窮のために商業学校を出たのみで、当時のオーストリア帝国の圧制に反抗し、しばしば实际行动に参加した。彼は無政府主義者であり極めて放埒であったが、精神的には自由だった。カフカが自己を押えながら、年金受給資格を得るまで真面目に役所勤めをしたのに対し、ハシェクは折角の勤め先の銀行を

わずか一年足らずで退職し、暮しのあてもない作家としての放浪の旅に出た。

両者の経歴がかけ離れているように、その生活の場所と時間も異なっていた。カフカは、まさに旧市街の中心に生れ、中世の面影をそのまま残す地域で生涯の大部分を送った。その生家と通った学校、さらに勤務先は、いずれも遠くても徒歩で二十分ほどの範囲内にある。彼の生活、特に幼年期は、ゴーレムが顔をのぞかせ、ファウストが瞑想にふけり、メフィストフェレスがささやきかけるような、暗く狭く寒い空間で送られた。ハシエクは、新市街のさらに外れにある新興地ヴィノフラディを主な根拠地とし、古い思想と体制を拒否して、革命の夢を追いながら無頼の日々を過した。ハシエクの生涯は、そのまま小説になると思われるほど起伏に富んでいる。若い頃からの国境を越えての放浪、反抗、ヤルミラとの愛、従軍、脱走、ロシヤでの革命軍への参加、新たな妻を連れての秘密の帰国、大作『シュヴェイク』²⁾の執筆、そして心臓発作による早逝。その行動半径はカフカの数倍に及び、特に、政治的社会的な活動や関心の点では、全く異質である。カフカは、政治に興味があったにしても実際行動はせず、第一次世界大戦や1918年のチェコスロヴァキア共和国の独立も、まるで関係がないような生活ぶりだった。カフカの描いた世界は、現実の出来事を離れた幻想的なものであり、ハシエクの作品のほとんどは、時代と風土に無視できないほど密着している。そして、読者又は批評家の期待は、まさにその相違点に集約される。たとえば、長篇『城』に出て来る女中のフリーダが、カフカの恋人ミレナ・イエセンスカーの面影を伝えるという意見は、『シュヴェイク』の中で徹底的に嫌味な役をするドゥブ少尉のモデルが、実は有名な言語学者でアカデミー会員だったF.トラヴニーチェク教授であるという説³⁾と同じ水準で考えることはできない。フリーダは作者の内部から必然的に生れ出るが、ドゥブは外部にあって、たまたま諷刺の対象として求められているに過ぎない。そこで、フリーダのモデルの詮議はほとんど無意味と思えるが、ドゥブが本当は誰かという質問は、少なくともチェコの読者にとって大

きな興味を呼ぶものである。

(II)

カフカとハシエクの両者の生活で共通点があったとすれば、それは文学者の集まるカフェによく通ったということであろう。当時のプラハには、ウィーンと同じような風習が多かったが、カフェの流行もその一つである。そして、ドイツ系の作家たちはヒベルンスカー通りのアルコに、チェコ人たちは現在のナーロードニー大通りのウニオンに集った。両者の交流もさかんだったが、当然ながらカフカはプロート、キッシュ⁴⁾などと共にアルコの常連、通称アルコナウトの一人で、ハシエクはウニオンを一つの根城にしていた。それらのカフェで、芸術家かたぎの若者たちが新聞雑誌を読み、顔をつき合せて芸術論をたたかわせ、怒り、悲しみ、泣き、笑いたした光景は容易に想像できる。ユダヤ系でありながらチェコ語で作品を書いたランゲルの思い出⁵⁾によれば、アルコには新刊の雑誌類がよく揃っており、又ウニオンの給仕頭パテラは一寸した理論家で、若い貧乏作家たちの面倒を見てくれ、文なしのハシエクによく金を貸してやった。幼時から餓鬼大将だったハシエクは、“ハシエク軍団”と呼ばれる仲間を引連れて、夜な夜なプラハのカフェ、キャバレー、飲み屋を徘徊していた。その中の一軒モンマルトルでは、あまりにも騒ぎすぎて、遂には閉め出しを食ったときえ伝えられている。この暴れん坊のハシエクとおとなしいカフカが、時にはどこかの店で顔を合わすことがあったのはまちがいない。それには幾つかの証言があるが、印象的なのはマレシュの記述⁶⁾である。すなわち、ハシエクが有名なでっち上げ政党「法の枠内での穏健な進歩の党」の候補者として、1911年、ボヘミア王国地方議員の補欠選挙の際、ある酒場で演説会を行なった時、カフカはそれに出席した。ハシエクの諷刺とユーモアに満ち、立会いの警官をからかい、遂に「弁士中止」の警告を出させるような痛烈な演説を聞いて、カフカは珍しく心から笑い、後に友人プロートたちにもその話をしたと言う。これが本当であれば、陽のハシエクが陰のカフカに与えた影響を実際に

示す、又とない例である⁷⁾。

(III)

言うまでもなく、カフカは大言語であるドイツ語で作品を発表し、ハシェクは小言語であるチェコ語を用いた。すなわち、世界文学の中で、カフカの小説は中心的で強力なドイツ文学に組入れられ、ハシェクの作品は周辺的で無力なチェコ文学に属する、とされる。その結果、前者は世界的名声を得、後者は地方的評判に甘んずる場合が多い。もちろん、文学の質として、カフカの作品の方が数等上であることは論議の余地がない。しかし、カフカの幻想は、何よりもプラハの町から生じ、ドイツ的と言うよりは、むしろチェコの、ボヘミア的な印象を与える。事実、その作品の大部分は、プラハのユダヤ人としての魂の表白と言っても過言ではないだろう。その生家の建物は、プラハの中のプラハである旧市広場に接し、又錬金術師が居たというプラハ城の足下にある有名な黄金小路（ズラター・ウリチカ）にはカフカが一時住んでいた不思議な家があり、カフカが永遠に眠るプラハ東部のユダヤ人墓地は、まさにボヘミアの雰囲気と風土に包まれている。さらに、彼の恋人の中で最も強い個性の持主であったミレナ・イエセンスカーは、文句なしにチェコ女性の一典型と言える。（ミレナについては、恋人カフカからの手紙、友人プーバー＝ノイマンの記録、娘ヤナの手記⁸⁾など各種の判断材料がある。）この性格にカフカが強く惹かれたのは、一つの宿命でもあった。この恋は、周知の如く実らなかつたが、カフカは、その手紙の中で「（ミレナの母語である）チェコ語に暖かみを感じる」と告白し、チェコ語で手紙を書いて欲しいとミレナに要求している。これはプラハでスラヴとゲルマンが争い、ゲルマンが勝利を納め、ドイツ語が完全に優位に立っていた当時としては、見逃せない意味を持つ。カフカが“完全な”ドイツ系の人間であったなら、そんな要求は恐らく出さなかつたであろう。又、もう一つ注目すべきは、当時のプラハのドイツ語は、チェコ語との接触のため、幾つかの点でその影響を受けていたことである。訛った発音、接続詞や

前置詞、再帰代名詞の非標準的な使用法、定冠詞の脱落、語彙の単純化等がその例で、ユダヤ人の場合は、さらにイディッシュの要素が加わった。その上、ユダヤ人の母語は、本来ヘブライ語であるが、ヤコブソンの記述⁹⁾によれば、プラハのユダヤ人は、すでに十三世紀頃から、ヘブライ語とチェコ語の混合した言語を“我等の言葉”と呼んでいたと言う。このような背景を持つカフカの言葉も、当然不安定であったに違わず、それに触れた記録も幾つか見出される。カフカの文体は、しばしば、“純粋な”“単調な”“写実的な”“抑制された”又は“稚拙な”などと形容されるが、その根底にあるのは、彼自身の用いている言語に対する一種の不安の念ではないだろうか。少なくとも、カフカの言語を論ずるには、上述の事情を十分考慮に入れることが必要と思われる。一方、先祖伝来のチェコ語で書いていたハシエクには、カフカのような不安はなかった。カフカの言語が幾つかの点で生気を欠いているのに反し、ハシエクの言葉は生きている、と評される。『シュヴェイク』の文体を分析した言語学者ダネシュは、その言語と文体が単純でないことを指摘し、卑俗語、口語、古語から新聞や役所の用語まで多方面にわたって用いられ、対照、皮肉、からかいの効果を含んでいることを述べている¹⁰⁾。(さらに、ロシヤ語の影響も特色としてあげられているが、これは数年滞在したロシヤからの帰国直後だったからであろう。)つまり、品の悪い言葉やきまり文句も多く、独創的ではないが組合せが巧みで、派手なにぎやかな文章とすることができる。カフカの、いわばモノクロームの静の世界に対して、ハシエクが描いたのは原色に彩られた動の世界だった。

(IV)

両者の文体の差と同様に、執筆態度も対極的であった。カフカは、昼間きちんと勤めた後、夜の静寂の中で“ガリガリと引掻き書く（クリツェルン=kritzeln）”孤独な作業に心身を擦り減らしていたが、ハシエクは夜遊びたい一心で午後の数時間で早々に原稿を仕上げ、すぐに出版社へ行って金に換えるような生活をしてきた。そして前借を常習とし、時

には猛犬を連れて乗込み、脅迫に近いこともしたらしい。ハシエクは本質的に短篇作家であったが、いつでもどこでも、どんな問題についても、即座に考えをまとめて書き上げる才能に恵まれていた。この点に関して、多くの友人の証言があるが、ランゲルとクジェイ¹¹⁾の記述が面白い。ハシエクは、ある時期、医学生だったランゲルの家に入りびたっていて、書棚にある医学書をよく読んでいた。世の中の事実に興味を持ち、新聞は裏面の広告から読む癖があった。時刻表なども克明に調べ、記憶力はよかったが、他の作家の文章はあまり読まなかった。原稿は、自宅でも他人の部屋でも、カフェでも電車の中でも構わず、雑記帳にでも何にでも書きまくった。商業学校へ通っていたせいとか、字は読みやすかったそうである。又、クジェイは、ある時期、他の友人と共にハシエクと共同生活をしたようで、その様子を小説仕立てで記録している。この仲間は共同分担執筆で、ある原稿の請負いをしたが、ハシエクの仕上げ速度はめざましく、ほとんどしゃべりながら書くようなやり方だった。自作の朗読が好きで、それを仲間に聞かせながら、誰かの意見があるとすぐに直し、最初の文には少しもこだわらなかった。しかし、言葉遊びを楽しみ、全体的に言葉使いにはやや神経質で、それなりの規範は持っていた。たとえば、ある時食卓で、一人が“臭い (smrdět)”という単語を使ったのを聞きとがめ、それは“匂う (páchnout)”と言うべきだと議論するようなこともあった。最後には酒場で他人に口述して筆記させるようなことまでしたが、その創作態度はカフカとは全く異なっていたのである。たとえば、ハシエクの実際の助手として、筆記役を勤めたことのある最初の妻ヤルミラは、次のような趣旨の思い出¹²⁾を記している。……ある時、ハシエクは、何でもよいから8ページの短篇を書きたいと言った。ヤルミラが8ページ分用意すると例によって景気よく口述し始め、たちまち残りわずかとなった。予定枚数超過は必至と思ったヤルミラが「もう少しページを足しましょうか」と聞くと、ハシエクは悠然と答えた。「いいよ、終りから3行目で主人公を殺してしまおうよ」……このようにして、ハシエク夫妻の手にかかり、終りから3行目であざやかなら

敵ない最期を遂げた主人公の数は、決して少なくない。ヤルミラの観察では、ハシエクは批評を気にせず、読者を楽しませることを何よりの目標としていた。

(V)

ハシエクの書いた短篇は、千数百篇に達し、しかもさまざまな偽名で発表されていて、その偽名の数の多さも異常である。ある記録¹³⁾には、全部で105の筆名が記され、コチカ、ペイシエク、グリーシャ、ガシエク、ベンジャミン・フランクリン等々、思いつく限りの名を使ったらしく、妻のヤルミラの名も入っている。上記の中、コチカは“小猫”，ペイシエクは“小犬”の意味で、動物好きだったハシエクにふさわしく、グリーシャは妻ヤルミラとの愛の思い出を伝え、ガシエクはハシエクのロシア語形であり、それぞれに意味がありそうである。ただ、なぜこんなに偽名を使う必要があったのかが問題になるが、ある程度理解し得るのは、当時の政治情勢と彼の立場との関係による、という説明である。すなわち、当時彼が寄稿していた新聞雑誌類は、それぞれ政治性を含めた特色を持っており、多くの社に作品を売するのに名を隠すのは止むを得ないことであった。特に、無政府主義者として、手当たり次第に権威者を攻撃することは、検閲のきびしさのため、本名では不可能だったと思われる。事実、ハシエクは、政治、警察、宗教、軍隊、教育の各方面での代表的人物ばかりでなく、善良な市民をも戯画化している。その集大成が『シュヴェイク』であるが、他の作品にも至る所にそんな場面がある。たとえば『シュヴェイク』にも出て来るインチキ興行師ムステクを中心にする一連の短篇は、嘘の宣伝に乗りやすい大衆を描いた興味ある物語である。(もちろんハシエクの最大の敵はオーストリアの帝政であり、その中心人物だったフランツ・ヨーゼフ一世は、たとえば「プラハにおける国家警察の足取りを追って」という短篇の冒頭で、次のように描写されている¹³⁾。……それは、皇帝フランツ・ヨーゼフ一世が、どこかの橋の礎石を小さな槌で叩くために、再三プラハへ行幸なさらなければならな

かった頃のことだった。つまり、チェコ問題においては、この老帝は、何よりも橋の専門家だったのである。皇帝はおいでになり、石を叩き、こうおっしゃった。「これは面白い、この橋はこちら側からあちら側まで通じているな」そしてさらにおおせられた。「諸君がシエコ人なので、うれしく思うぞ」そこで、このような御訪問の後いつも、チェコの全国民は、このお年寄りの中風にかかっているのだという印象を持った……) 言うまでもなく、これほど多くの作品がすべて傑作であるはずはなく、全く玉石混淆であり、パロディ、ナンセンス、グロテスク等々に分類される数多くの要素があるが、何よりも諷刺とユーモアがその基調となっている。ヤルミラは、ハシエクはユーモリストと言うよりむしろ諷刺家であるとし、例の「泣きたくないから笑うのだ」こそ、ハシエクの本質だと述べている。たしかに、そのユーモアは、カフカほどでないにしても、一種の苦味を含む。この苦味を誰よりも強く感じていたのは、他ならぬ作者であつたらう。

(VI)

しかし、外部に映ずるハシエクは、無責任な道化だった。パロットは、これをハシエク＝シャシエク (sasek＝道化者) という表現で示している¹⁵⁾。このハシエク＝シャシエクが、ひどく真面目になった時期が2回は存在する。最初はヤルミラに求婚していた時で、未来の妻の父親の要求を入れ、友人ハーイエク¹⁶⁾の好意で『動物世界』の編集という定職につき、しばらくはちゃんと勤めた。しかし、例によって約束を守らず、間もなく再び無頼放浪の生活に戻り、遂には一子を生んだヤルミラにも去られてしまった。やがて第一次世界大戦が起り、オーストリア軍の一兵士として従軍したが、ロシア軍に進んで投降し、いわゆるチェコ軍団の一員となり、後にロシア革命と共に軍団を離脱してボルシェヴィキに転じ、赤軍の政治委員にまでなった。これが2度目に真面目になった時期である。この革命軍時代のガシエク、又はオシポヴィッチ同志、つまりハシエクが、酒を少しも飲まずに勤務に精励したことも、多くの記録が

告げている。これは、過去のあのハシエクを知っている人たちには全く信じられなかった。もっとも、この時代の赤軍の戒律はきびしく、禁酒令を破る者は銃殺するとの決定さえあったことは、ハシエクのブグリマ短篇集、特に「ブグリマ市の司令官付副官」によっても推察される。しかし、生来の性分で相手構わず攻撃の筆を揮ったハシエクは、各方面に敵を作って、次第に居心地が悪くなったらしい。幸いにも、上部からの指令で、帰国してチェコでの革命運動に従事することになったが、本国での革命運動は失敗していた。大統領 T.G. マサリクの下に建設された新生チェコスロヴァキア共和国に失望したハシエクは、再びアルコールびたりの状態になった。そして、ロシヤから連れて来た二度目の妻シュエーラを抱えて、重婚の罪を問われ、前妻ヤルミラと息子リハルト¹⁷⁾への思いに悩みながら、シャシエクの決定版である『シュヴェイク』を書き始めたのである。

(VII)

ハシエク＝シャシエクと似たような意味で、カフカ＝ザムザという式が成立するであろう。『変身』の主人公の姓ザムザは、同じカフカの作り出したあのオドラデク¹⁸⁾と共に、スラヴ語でもなくドイツ語でもない。ただ、チェコ語でザムー(=zam-)を含む語の仲間には、拒否的なニュアンスを持つ動詞が幾つもあげられる。すなわち、ザメジト(zamezit=制限する)、ザミートノウト(zamítnout=拒否する)、ザムクノウト(zamknout=閉鎖する)、ザムルチト(zamlčet=隠す)、ザムルズノウト(zamrznout=氷らせる)など。そして、特に印象的なことに、“城”つまりドイツ語のシュロス(Schloß)に当るチェコ語は、ザムクノウトと関係するザーメク(zámek)である。ザムザという音構成は、これらの意味を連想させないだろうか。一方、カフカという姓は、よく知られているように、チェコ語では普通名詞(ただし kavka と綴る)で、小型の鳥のことを指す。しかし、この“鳥”は、悪魔を思わせる大型の鳥ではなく、むしろ日本語で「鳥の勘三郎」と呼ぶような愛嬌を感じさせ、

チェコ語では“お人好し”の意味さえ持っている。そしてもちろん、カフカはその意味を十分に知っていたに違いない。もしそうであるとしたら、カフカからザムザへの移向は、偶然に選ばれたのではなく、“お人好し”から“拒否的で閉鎖された非人間的なもの”への変身を象徴するとさえ考えられる。

(VIII)

カフカは自らの内面的要求に従って書き、ハシエクは生活のために売文した。カフカの作品は、いわば強い求心力を持ち、読者を底知れぬ不気味な深みに引込んで行く。ハシエクの作品は、まるで一種の遠心作用を持つかのようで、読者は笑いによって暗い気持ちさえ吹飛ばすことができる。カフカには求道者的な雰囲気があるが、ハシエクには崩れた酒飲みのイメージが濃い。プロートの名付けた、カフカの孤独三部作 (Trilogie der Einsamkeit) も、ハシエクの『シュヴェイク』も、いずれも未完であるが、三部作の主人公たちは、いずれも、何か正体不明の力によって、ある種の罪を負わされている。それは、すべて当人の意志によるものではない。異国に追放された『アメリカ』の主人公の場合でも、直接の罪は“女中に誘惑されて、子供を作られてしまったため”¹⁸⁾であり、当人の主体性のある行動のためとは言えない。同じ受難の物語でも、『城』のKは遂に目的地に達することはできず、『審判』のヨーゼフ・Kは、奇妙な二人の男に物のように扱われ、“犬のように”殺されてしまう。一方、シュヴェイクは絶対に“物”にはならず、相手の意表にばかり出て、危機を脱出する。このような表面上の相違にもかかわらず、カフカとハシエクは、あのハムレットとドンキホーテのように、人間性について補い合う面を持つ。これは、『カフカとの対話』の著者であり同時に『ハシエクの生涯』を書いたヤノーホ、さらに誰にも勝るカフカの理解者であると共に『シュヴェイク』を絶賛したプロート、その他多くが認める所であろう。そして、哲学者コシークは、この両者を比較したすぐれた論文²⁰⁾を、次のような言葉で終らせている……カフカは人間が物

体化される世界を描き、人間は人間であるためにあらゆるタイプの疎外を経験し生き抜かねばならぬことを示したが、ハシエクは、物体化を超越する存在として、物体にはならず、物体化の作用の産物や関係に落ち込むことのない人間を示した。一方は人間性についてマイナスの、他方はプラスの尺度を設定したのである。この意味で、ハシエクとカフカは、その故郷の町の偉大なる嫡出子であり、プラハと全世界に等しく属する存在である……

(IX)

百塔の町プラハは、同時に百もの表情を持っている。明るい夏の日射しの下に映えるフラチャニの城、暗い冬の夜の闇の中に息づいている古いユダヤ教会、ロマネスク、ゴシック、バロックと色も形もさまざまな建物のきらびやかな列、思いがけぬ広場に不意に抜ける無表情なアーケード、豊かなヴルタヴァ（独名モルダウ）の流れに遊ぶ活発な明るい髪の少女たち、狭い裏通りの塵芥の山の中から古い紙屑をあさる干からびた老婆、暖かく挨拶するにこやかな市民たち、冷たく応答する渋面の役人たち。風景と人が織りなす模様は、たとえ表面の社会体制がどのように変わっても、深い底では常に同じに違いない。そして、人間が生活を営んでいる限り、世界中の都市では、共通の要素が共通の顔を作り出して行く。青白くやせこけたカフカの顔、血色よく丸々と肥ったハシエクの顔——それは、スラヴ、ゲルマン、ユダヤ、さらにラテンの各文化の流れがぶつかり合い争い合う、比類なき精神的エネルギーに満ち、数多くの作家、芸術家、思想家を生み出した黄金の都プラハが人類に与えた、普遍的とも呼べる二つの顔である。

(注)

- 1) カフカについては、作品や伝記の翻訳など、日本語の文献も数多く、説明は不要であろう。ハシエク関係の文献は非常に少ないが、邦訳された伝記には、土肥美夫訳 G・ヤノーホ『ハシエクの生涯』みすず書房 1970がある。なお、

本国では、最近 5 巻の選集が刊行された。

- 2) 原題は *Osudy dobrého vojáka Švejka za světové války* 「よき兵士シュヴェイクの世界戦争中の運命」日本語にはいろいろに訳されているが、栗栖継訳『兵士シュヴェイクの冒険』1～4 岩波文庫が代表的で、特に第 4 巻にはすぐれた解説がある。
- 3) この説はイギリスのハシェク研究家パロットが紹介している。C. Parrott. *Jaroslav Hašek A Study of 'Švejk' and the Short Stories* Cambridge Univ. Press 1982 参照。F. Trávníček (1888—1961) チェコ語学の権威者。
- 4) M. Brod (1884—1968) ユダヤ系のドイツ語作家で、カフカ文学の紹介者。E.E. Kisch (1885—1948) プラハのドイツ語作家。新聞記者でもあり、全世界にわたるルポルターージュは有名である。
- 5) F. Langer (1888—1966) 作家として有名だが、医者でもあった。回想記 *Byli a bylo* (あの人たちとあの頃) 1963 の中にハシェクやチャベック兄弟の思い出が記されている。以下この回想による所が多い。
- 6) M. Mareš ジャーナリストで無政府主義者。K. ヴァーゲンバッハ著中野孝次・高辻知義共訳『若き日のカフカ』竹内書店 1969 にその思い出がある。
- 7) ビトリークは、カフカがこの時の演説会によく出席したとし、その影響が『アメリカ』の中に見られると述べている。R. Pytlík. *Jaroslav Hašek* 1962 しかし、パロットはこの説にやや懐疑的である。なお、筆者は、この党名を「法の枠内でのゆるやかな進歩の党」と訳したことがある(『万有百科大事典』文学篇 小学館 478 ページ)。このふざけた党の連中には無政府主義的急進主義者が多かったのだが、わざと逆の表現をしたものと思われる。場合によっては“いい加減な進歩”位に訳してもいいのかもしれない。
- 8) 前 2 者の邦訳として『ミレナへの手紙』新潮社、『カフカの恋人ミレナ』平凡社がある。ヤナの手記については、『月刊百科』no. 178 平凡社 1977 44—45 ページの拙文「第三のミレナ像」を参照されたい。
- 9) R. Jakobson (1896—1982) ユダヤ系のロシア出身の言語学者。いわゆるブラハ学派の中心的人物であったが、アメリカに脱れて後半生を過した。学問的業績は非常に大きい。ここでの著書は *Moudrost starých čechů* (昔のチェコ人の知恵) New York 1943.
- 10) F. Daneš. *Příspěvek k poznání jazyka a slohu z Haškových Osudů dobrého vojáka Švejka* (ハシェクの『シュヴェイク』の言語と文体の理解のために) *Náše řeč* (我々の言葉) 1954 6月号
- 11) Z.M. Kuděj (1881—1955) 旅行好きの作家。 *Když táhne silná čtyřka* (強力四人組の共同生活) 1948 中にハシェクが登場する。

- 12) Jarmila Hašková. *Drobné příběhy* (ささやかな物語) 1960
- 13) R. Pytlík, M. Laiske. *Bibliografie Jaroslava Haška* (ヤロスラフ・ハシェク関係の文献) 1960
なお、同書には辻恒彦訳『愚直兵士シュベイクの奇行(前線へ)』三一書房の写像があるが、これを中国語版と誤って説明している。
- 14) 『ハシェクの生涯』にも、この話の一部が(ドイツ語から訳されて)出ている。
- 15) C. Parrott. *The Bad Bohemian A Life of Jaroslav Hašek Creator of the Good Soldier Švejk* 1978
- 16) L. Hájek. ハシェクの商業学校からの友人で、早くも 1903 年にハシェクと共著の詩集 *Májově výkřiky* (五月の叫び) を出している。
- 17) この名は英語のリチャードで、ハシェクはイギリスのリチャード一世(獅子心王)に関心があり、ヤルミラはリチャードの愛称のつもりで、ハシェクをグリーシャと呼んだらしい。
- 18) オドラデクについては、プロートなどの解釈があるが、音声的に近いチェコ語の単語としてはオトパデク (odpadek) がある。これは意味的にドイツ語のアプファル (Abfall) と一致する。すなわち“屑”、“廃棄物の一片”を指す。
- 19) この原文は ...weil ihn ein Dienstmädchen verführt und ein Kind von ihm bekommen hatte... で、“女中”が主語になっている。
- 20) K. Kosík. Hasek and Kafka *Telos* No. 23 1975 なお、同号には、リーム (A. J. Liehm) の論文 *Franz Kafka in Eastern Europe* がある。又、チェコにおけるカフカの評価の一部については、リーム著(拙訳)『三つの世代』みすず書房 1970 中の、ゴルトシュテュケル (E. Goldstücker) との対話を参照されたい。